

# 利子生み資本の変容

——近代的銀行業の成立をめぐって——

小 牧 聖 徳

一

利子生み資本は資本主義社会においては、銀行によつてその大いなる部分をになわれ、機能資本の獲得した利潤の中より利子を徴することによつて価値増殖運動をたえまなくつづけて行く。しかしながら利子生み資本は資本主義社会に特有のものではないことは、商業資本が資本主義社会特有のものでないのと同じく、資本主義社会以前から、古く存在していたのである。資本主義社会における利子生み資本は機能資本としての商業、産業資本の利潤の一部を利子として入手するのであるが、これに対し資本主義社会以前における利

子生み資本は、その利子をば浪費的豪族や農民、手工業者から、根源的には直接的生産者たる農民、手工業者から、彼等の剰余価値の殆んど全部をば収奪するのである。利子生み資本の先資本制的形態は高利資本と称せられることもあるが等しく  $G \text{---} (G + g)$  という運動形態をとることに於いては資本主義的利子生み資本と異なるものではない。同じく利子生み資本であり、運動形態の同一性にもかかわらず、いわゆる高利資本と資本主義的利子生み資本との間には内容的に検討するならばその資本の担い手においても、貸出の対象においても、したがってまた徴収する利子の源泉においても、それぞれの相違を見出すことが出来る。そ

これはおのおのの資本が存在する社会そのものを異にするというところから、おのづから導き出され得るものであり、社会そのものの相違が利子生み資本におけるそれぞれの特徴を生み出したものに外ならない。

ふるい社会が、あたらしい社会に向って進み、完全にあたらしいものとして完成される過程においては、常にふるい社会の残存物はたえず消滅する過程においてではあるが残存するものである。資本主義の胎内にも小部分としてはあるが封建的な残滓物を消滅の過程において残存せしめているがごときである。利子生み資本においても決して例外ではありえない。ふるい利子生み資本が、近代的銀行業によって担はれたあたらしい利子生み資本によって、とってかわられる過程においては、常にふるい利子生み資本とあたらしい利子生み資本との併存を見るのである。いづれはふるい利子生み資本は、あたらしいそれによっておきかえられるとしても、それは一つの線にすぎたがごときものとしてではなく、ふるきもの、あたらしきものの、

併存のうちに、しかもあたらしきものへ移ろうとするところの過程的すがたが併存した形において見られる。このふるき利子生み資本からあたらしきそれへの過程において、ふるき利子生み資本に対する反逆としてあらわれたあたらしき利子生み資本、それが近代的銀行業の成立への道の意味するものであろう。

すでに述べたごとく、ふるき利子生み資本はしばらくはあたらしきそれと併存し得るとしても、もはやふるきものは支配的なものではあり得ず、あたらしき社会においては旧社会の残滓物たるにすぎず、したがってあたらしき社会を特徴づけうるものではあり得ない。あたらしい社会、資本主義社会において、支配的な利子生み資本は近代的銀行業によって担はれたるそれであり、機能資本に対する無機能資本として、機能資本の入手する利潤の中から利子を徴収する。その意味においては機能資本に従属するところのそれである。ふるき利子生み資本に対する反逆としてあらわれたるあたらしき利子生み資本は、それが機能資本に従属せる

が故にあたらしいのである。それは高利の拒否を意味するが故にこそ、ふるき利子生み資本が社会的に擯斥され、呪詛の対象たりしに反し、あたらしきそれが社会的に公然と承認されたるものとしてあらわれ得るのである。ここに利子生み資本の近代的すがたがみられ、その担い手としての近代的銀行業があらわれ得るのである。

本稿においては、利子生み資本のふるきもの、あたらしきものについてその成立の地盤、特徴等をたづねることによって、利子生み資本の変容すがたをとらえ、それを通じて近代的銀行業の成立を見ようとするものである。けだし近代的銀行業はあたらしき利子生み資本の担い手にほかならず、利子生み資本のふるきもの、あたらしきものの把握こそが近代的銀行業の成立を解明するものであると信ずるからである。順序としてまづふるき利子生み資本、いわゆる高利資本をとらえ、それがふるき社会からあたらしき社会への移行についてどんな役割を果すものであるかを見、つい

であたらしき利子生み資本とふるいそれとを対比して考え、最後にふるきものへのあたらしきものたたかいつとしての近代的銀行業の成立をば若干の歴史的事実とともに示そうとするものである。

## 二

商品交換の発展は多数の商品の中から特殊な一商品をば一般的等価物として打出す。この一般的等価物は貨幣に外ならない。商品貨幣としては家畜等が歴史上にあらわれ、ついでその彼方に没し、ついには金に固有の物理的性質の故に貨幣は金に固着したのである。「金銀は生れながらに貨幣ではないが、貨幣は生れながらに金銀である」<sup>①</sup>と言はれるのは、金銀の物理的性質が貨幣にもつともよく、適していることを示したものにほかならない。

この一般的等価物としての特種なる商品、すなわち貨幣は価値尺度機能と流通手段機能とを統一的に有するものとして生成する。この両機能は貨幣を貨幣たらし

しめる基本的な機能である。すなわち本質としての一般的等価物がこの両機能において先づあらわれるのである。<sup>③</sup> 価値尺度機能は観念的な金によって、流通手段機能は金の代理者によって果され得る。ところが貨幣商品としての金が、金そのものとしてあらわれなければならぬ機能はつぎの三つである。すなわち蓄蔵貨幣、支払手段、世界貨幣以上である。

ところでこの貨幣はあらゆる商品と直接交換され得るものであるから、形態的にあるいは質的には制限をもっていない。しかるに他方現実には質的には制限された存在である。貨幣の質的無制限性と量的制限性とのこの矛盾は、貨幣を追求しこれを蓄蔵しようという衝動をかきたて、ここに貨幣蓄蔵者を生み出す。彼はあくことなき貪欲さをもって貨幣を追つてこれを蓄積しようと努力する。彼が蓄積しようとするのは資本ではなくして貨幣としての貨幣である。けれども彼は貨幣の蓄積を更に増大させようとして利子をとつて貸付けることにより、より大いなる貨幣を入手

する。ここに彼は利子を通じてその蓄蔵貨幣を資本に転化する。かくして職業的な貨幣蓄蔵者は高利貸になるのである。商人もやはり貨幣を追求するという点においては高利貸と異なるものではない。けれども商人の場合においては商品をば貨幣蓄積の媒介として扱う。高利貸においては無媒介にして且貨幣をあくとなく追求するのである。この高利資本は商人資本とともに、ふるくから存在したけれども、高利資本の実存のために必要なのは、つぎのことからだけである。すなわち「諸生産物の少くとも一部分がすべてに商品に転化しているということ、および商品取引と同時に貨幣が相異る諸機能において發展しているということ」<sup>④</sup>である。商品生産—流通の最も發展せる社会は資本主義社会であるが、全面的な商品生産—流通の行はれない古代社会において、すでに高利資本はその成立の地盤を獲得しているのである。

貨幣蓄蔵者は高利によって貸出すことにより彼の蓄蔵貨幣を資本に転化しますます蓄積を増大させる。こ

れに對し彼より借入れる者は、借入れた貨幣をば購買手段、支払手段として使用するのである。天災地變や、災難によつて生活手段や原料等が不足した時とか、あるいはまた普通の再生産の過程によつては生活手段や原料が補填され得ないような時には、購買手段として使用すべく貨幣が借入れられる。けれども高利資本が高利資本として成立し且その地盤を拡大するのは、貨幣が支払手段として必要とされるようになるからである。商品生産—流通の範圍がせまければせまいほど、したがつて生産物が商品に転化する度合が少ければ少いほど貨幣は流通することが少く、したがつて入手することが困難である。しかも一定の時期には貨幣での支払をばしなればならない。たとえば租税とか土地の借料または貢租等である。そのためには支払手段としての貨幣の借入れが必要とされるのである。さらに商品生産が一般化されるにつれて購買と支払とが時間的に分離され、支払が購買と同時にに行はれなくなればここに貨幣は支払手段として使用されるように

なる。これらの支払手段を入手するために高利資本より貨幣が借入れられるが、それによつて借入人は債務の深みに陥り、また借入れた貨幣の利子の高いために、それを負担するためには通常の彼の支払手段にてはまかなうことが出来ない。だから彼の再生産の継続のためには、さらにあらたなる支払手段を入手することが必要となり、ここに支払手段の必要がさらにまた支払手段を必要とし、かかる循環において高利の地盤が拡大されることとなるのである。

ふるき利子生み資本たる高利資本の特徴はつぎのようなものである。まづ貸付の対象についてみると、それは浪費的豪族および手工業者、農民等の自立的、個別的小生産者であるということである。つぎに利子について見ると、それは極めて高率であり、個別的生産者たちの必要不可欠の生活維持手段をこえるすべての超過分が収奪される、すなわち国家に帰属する部分以外のすべての剰余価値が利子として収奪されるのである。さらに高利貸は自分の犠牲者の剰余労働を搾りと

るにとどまらず、土地とか家屋等に対する所有名義を獲得して、たえず犠牲者を収奪するのである。

これに対して資本主義的利子生み資本においては、その貸付の対象は機能資本家であり、その正常な利子は剰余価値の一部にすぎず、その残りは企業者利得すなわち商業利潤、産業利潤として機能資本家の手もとにのこるものである。さらに労働諸条件の収奪についてみるならば、このことは資本主義生産が目的とするものではあり得ない。逆にすでに労働諸条件の収奪が完了したるが故に資本主義社会の成立を見ているのであって、かかる労働諸条件の収奪があつたればこそ、収奪されたひとびとは自由な労働者として、資本主義社会をば成立せしめたのであった。<sup>④</sup>資本主義社会の労働者は債務なくしても、しかも資本に収奪されるのであるが、高利資本の下での小生産者たちは債務のために、債務奴隷として苦しめられ収奪されたのであった。

小生産者達は高利によって苦しめられたが浪費的豪族もまた多く収奪された。けれども彼等は収奪される

分をば小生産者たちに転化して、自分みづからがしばり取られるのが多ければ多い程、小生産者たちからしばり取るのであり、結局直接的生産者はますます収奪をうけるのである。高利貸の浪費的豪族への貸付けはそれによって浪費的豪族の土地所有、奴隷所有をば破壊して高利貸みづからが、奴隷あるいは土地の所有者となり、ふるい社会の崩壊をうながすことにもなった。「高利が二重のことに——第一には総じて商人身分と相ならんで自立的な貨幣財産を形成することに(成功し)、第二には労働諸条件を取得すること、すなわち旧生産諸条件の所有者を破壊させることに成功するかぎりには、高利は産業資本の諸前提を形成するための有力な一槓杆である」<sup>⑤</sup>。

資本主義以前の社会において高利が革命的なはたらきをするのは、所有形態を破壊し分解するからに外ならないし、高利は一方では収奪によって自由な労働者を形成せしめ、他方では蓄積によって大貨幣資本を形成して、ここに従来の生産様式を填覆しかつ破壊させ

る作用を促進し、あらたなる生産様式、すなわち資本制生産様式の形成手段の一つとなるのである。

### 三

ふるい利子生み資本に対する反撃として、あたらしい利子生み資本が信用業に担はれてあらわれるが、これはあたらしい利子生み資本がふるいそれに、すつかりとつてかわることを意味するのではなく、社会的には、ふるきものとあたらしきものが併存するものであることは、すでに述べたごとくである。

この信用業の成立する社会的地盤としては、つぎの二つである。すなわちまづ「第一には、貨幣—貴金属の形態での—は依然として信用業が事態の本性上として離脱しえない基盤だということであり、第二には、信用制度は私人たちの手における社会的生産手段の（資本および土地所有の形態での）独占を前提とするということ<sup>⑥</sup>」である。すなわち貴金属の形態での貨幣は信用制度の基盤であるということであり、そしてこ

の貨幣の存在はとりも直さず商品生産を前提とすることを意味している。そして第二には信用制度は前提として私人たちの手における資本や土地所有の形態での、社会的生産手段の独占を要求するということである。

信用業の発展は高利資本に対する反作用としてあらわれ、あらたな利子生み資本は、だいたにおいて、資本制生産様式の条件に適合させられる。しかし高利資本もふるい利子生み資本として資本主義社会の内にあたらしいそれと併存している。すなわち資本制生産様式の意味では借ることの出来ない事情のもとでは、個々人に対しては利子生み資本は高利資本の形で残っている。たとえば質屋から個人的消費の必要のために借入れる場合とか、非資本家的生産者である小農や手工業者が借入れる場合とか、あるいはまた、資本家的生産者であっても、彼自身が小規模で操作しているようなときには、利子生み資本は高利資本の形を保持している。このような高利資本の形態をもっている利子生み資本と、資本制生産様式の条件に適した利子生み

資本との区別は、すでにふれたごとく、それが資本制生産様式の基礎の上で産業資本家もしくは商業資本家に貸付けられるものであるのか、あるいは資本制生産様式が存しないところの直接的生産者に貸付けられるのかということであって、いいかえると資本が機能するところの条件、すなわち借手の姿容がどうであるのかということである。借手が借受資本をもって資本家として機能して、不払労働を取得するならば、その場合はまさに、資本制生産様式に適合した利子生み資本として貸出されたのである。そしてこの場合は獲得した剰余価値の一部分をば利子として貸手に支払うこととなるのである。これに対して資本制生産様式が存しない直接的生産者の場合の利子は、不払労働部分ではなく、彼みづからの労働部分である。

#### 四

近代的銀行業は高利資本に対する反逆として生れ出たものであって、ふるい利子生み資本たる高利資本の

否定のうちに、あらたなる利子生み資本の成立である。もちろん近代的銀行業が担うあたらしい利子生み資本とともにふるい利子生み資本も併存することはしばしばのべ来つたごとくである。近代的銀行業の成立によって利子生み資本は、かつての増悪、呪詛の対象から公然と承認されたものとしてあらわれるが、それが可能なのはあたらしい利子生み資本が商業および産業資本に従属したものであるからである。高利の排撃は銀行業の側からの資本主義的生産の促進をうながすものである。

近代的銀行業はその一方では一さいの死蔵された貨幣準備を集積して、これを貨幣市場に投じることによって高利資本をその独占的地位からけおとし、他方では信用貨幣を創造することによって、既存の貴金属の独占者である高利資本に対抗するものとしてあらわれるのである。

高利資本に対する反撃としての銀行業の生誕の歴史を示すものは、十二—十四世紀における信用組合であ

る。当時イタリーのベニス、ジェノアにつくられた信用組合は、高利の支配と貨幣取扱の独占とから、海上貿易およびこれに基く卸売業を解放しようとして生じたものであると言はれている。ここに近代的銀行の萌芽を見ることが出来る。

一六〇九年の北海のアムステルダム銀行は一六一九年のハンブルグ銀行と同じく純粹の預金銀行であり、銀行の發行する手形は預託された貴金屬の受取証にすぎず、受取人の裏書によって流通した。この両銀行は、高利資本にかわるべきものとしての意味においては、既に近代的銀行業として成立していたとみることが出来る。何となればオランダでは当時すでに商業および製造業が、十七世紀における経済的發展の典型国と見なされる程に発達しており、商業信用および貨幣取扱業も發展を上げており、利子生み資本はすでに商業資本、産業資本に従属していた。利子の低さがこのことを示しており、したがって高利の排撃はそれ程問題にならないし、その意味で高利資本にかわるころのもの

としての近代的銀行業の生成をすてに見ておると言えよう。もっとも純粹の預金銀行として貴金屬の受取証券を發行するにすぎないという点からは、貨幣取扱業としての色彩の極めて濃厚な銀行ではあるけれども<sup>⑦</sup>

イギリスでは十七世紀の末頃から十八世紀初頭にかけて高利に対する反対、すなわち高利から国家、商業および産業を解放せよという要求があらわれる。これは利子生み資本をば商業資本や産業資本に従属させよというさげびにはかならず、高利資本に対する排撃であるとともに、それによって近代的銀行業の生誕を準備するものである。高利資本にかわるものとしてのイングランド銀行に先立ち、一六八三年に国立信用銀行が日程にのぼった。この銀行は産業家や商人に対して、預託された商品を担保として商品価値の四分の三を手形で貸付けた。この手形を流通可能ならしめるために、各事業部門ごとに組合が結成され、この手形を所有する各人は、現金で購入するのとあたかも同じように、

この手形で組合から商品を受取り得るようにした。けれどもその機構が複雑すぎ、且また商品の価値減少の場合の危険があまりにも大きすぎたために、事業は繁昌しなかつたと言はれている。ついて一六九四年設立のイングランド銀行は、すべての金匠や質屋すなわち

高利資本の憤激をかった。それはイングランド銀行のおかげで彼等の取引が減少し、その割引料がおしきげられ、彼等がそれまでおこなっていた政府との取引が、このイングランド銀行の手にうつつたからであつた。

ここにおいてわれわれは、高利資本の排撃としての近代的銀行の成立を明確にみる事が出来るのである。

すでに述べたところから要するに、近代的銀行業の成立は、利子生み資本をば産業、商業資本へ従属させようとする社会的要請が、高利資本にかわるあらたなる利子生み資本の登場となつてあらわれるところに見

ることが出来るのである。

〔註〕

- ① 「資本論」長谷部訳一ノ一 二八九頁
- ② 機能と本質の両者を見ることによつて貨幣は正しく把握されるがこの機能は本質の機能なのであり、機能そのものは本質を前提とする。
- ③ 前掲書 三ノ三、五二一頁
- ④ レーニンは資本の発生のための歴史的な前提として二つのものを示している。その第一は『商品生産一般の比較的な高度な発展水準のもとでの個々の人物の手における一定額の貨幣の蓄積であり、第二には、二重の意味で自由な——人格的に且生産手段一般から——労働者の現存である。』ところでもし直接的生産者が労働諸条件を取奪されなかつたならば彼は天涯無一物な労働者にはならなかつたであらうし、かくして資本主義社会も成立しえないであらう。
- ⑤ 前掲書 三ノ三 五五五頁
- ⑥ 前掲書 三ノ三 五四七頁
- ⑦ 「銀行通論」高木鴨哉 一四二頁